

札幌市立平和小学校の取組【環境：地域・外部人材活用】

1. 研究のねらい

本校は、西区の平和地区に昭和 59 年に開校した。かつてこの辺り一帯は、札幌郡上手稲村と呼ばれ、昭和 42 年に札幌市と手稲村が合併することにより、札幌市に編入された。当時の地名が表すように、この地域は、札幌の米どころの一つとして栄えていった経緯がある。平和地区は、その西野の開拓が進んだ結果、開けた地域である。校区の歴史を紐解くとき、米作りは欠かせない一つの特色となっている。

そこで、本校では、地域の特色の一つである米作りの歴史とそれに係る環境を、本校の特色ある教育活動の一つとして教育課程に位置付けている。5・6 年生では、総合的な学習の時間に、「地域や学校の特色」について、テーマを設定し学習を行う。学習を通じ、地域に目を向け、地域環境を守り続けようという意識を育てていくことをねらいとしている。

2. 取組内容

(1) 米作り体験を通じて地域への思いが生まれる

①自分たちで米を育てる

本校には、稲作用の学級園がある。そこに、5 年生が、北方自然教育園から、苗を提供していただき田植えを行う。米作りに関わり、総合的な学習の時間や、理科、家庭科、保健の学習を有効に関連させながら学習を進めていく。

まず初めに、米作りを始めるにあたり、地域の歴史を学ぶことから始める。今は住宅地となり、普段、自分たちが生活している校区が、かつて水田であったことを知ると、驚く児童も少なくない。そこで出てくる、「どうして今は水田がないのだろう。」という問いが、学習の最後に大きく意味をもつことになる。

また、本校では、栄養教諭による食指導や学年でのランチルーム給食を、年間を通じて計画し実施している。自分自身の身体の成長について学んでいくときに、主食である米を、「自分たちの手で作っていく。」という経験は、食生活を考える力の土台の一つとなっている。

②地域行事との連携を図る

本校の校区に隣接している五天山公園では、西野地区の米作りを後世に伝えていく取組として、「水車で地域交流会」（水車で地域交流会実行委員会主催）が毎年行われている。五天山公園の一角では、かつてこの地域に 140 基あった水車が復元され、見学することができる。本校を含め西野地区にある小学校 4 校の児童や地域住民 150 名近くが参加するこの交流会であるが、中でも本校の児童の参加は多い。

交流会では、「西野地区水車を保存する会」の方々に指導を受けながら、水車で行う精米作業を見学する。また、実際に、瓶やすり鉢などを使って精米体験を行う。手作業の精米を体験することにより、水車で行われる精米の便利さを感じることにつながり、なぜ、この地域に 140 基もの水車が存在したのかを考えるきっかけとなる。また、羽釜を使った炊飯にも挑戦し、地域町内会女性部の皆さんが調理したカレーと一緒に、美味しそうに頬張って食べる姿も見られた。

休日に、地域で開かれる行事へ、積極的に参加し、そこで得た知識や体験を、また学校での学びを生かすことは、児童にとって大変貴重な経験となっている。そして、またそのような場で、地域の方との触れ合う関わりも、自分が地域の一員であることを意識する機会となっている。児童の中には、「大切にしたい平和地区」という地域への郷土愛が育まれていく。

(2) 外部との関わりが、地域への思いをより強いものにする

① 収穫・精米作業を自分たちの手で

秋になり、米の収穫の時期なると、学級園で成長した米を収穫する。ほんの小さな作付面積であるが、収穫・精米には結構な手間が掛り、重労働である。「もしこれが、大きな水田だったら。」という思いは、地域にあった水車の存在につながる。

精米には、西区西野街づくりセンターから、精米する道具をお借りしている。精米作業自体は、先に行われている「水車で地域交流会」での体験と同じであるため、できる児童が多いが、今度は、「自分たちで育て、刈り取ったお米」という思いがそこに加わり、作業に対する熱意や思いは全く異なる。もみ殻が取れるまで白く精米しようと、懸命に頑張る児童も見られた。



② 羽釜体験

地域にある、NPO 法人「あどベンチャースクール」と連携し、外部講師をお招きして羽釜体験を行う。自分たちで薪を割り、火をおこして炊飯をする活動は、児童にとって貴重な経験となる。

ここでは、滝野宿泊学習でお世話になった、ネイチャーガイドの先生たちとの再会も見られた。「お焦げが美味しんだよ。」と、火加減についてガイドの先生が話されている内容を、真剣に聞いている様子も見られた。炊けたご飯は、学年全員で、家庭科室で美味しく食べた。

毎日食事を作ってくれている家族への感謝の思いや、食べ物を粗末にしないという思いが、児童の中に見られた。

3. 成果と課題

(1) 成果

高学年の社会科では、農業・漁業・工業などの「産業」についての学習や「歴史」についての学習を行う。児童がこれらの学習を通じて、社会との結び付きを考えていく上で、そこに自分のごく身近な産業や歴史がリンクされてくることの意味は大きい。

実際に学級園で稲を育てていく活動が、児童の課題を生み出すきっかけとなり、主体的な学びが進められた。さらに、理科、社会、家庭科、保健、道徳といった、他教科とクロスさせて、活動を進めていくことができたことは、「生きた学習」として、大変意味があった。

児童のまとめには、「平和地区に米作りを復活させたい。」「豊かな自然を守っていきたい。」など、郷土愛につながる思いが書かれていた。地域に目を向け、地域環境を守り続けようという意識を育てていくというねらいを、達成することができた。

(2) 課題

年間を通じての、長い帯での学習になるため、学習の目的やねらいをはっきりとさせ、つなげていくことが大切になる。成果に挙げられるように、他教科と関連させていくことのできる取組であるため、計画が多岐に渡り、目的が拡散してしまうことも予想される。

学習をまとめていくにあたり、児童の意識の中に、「実際に地域に取材したい。」という思いが出てきていた。代替わりが進む地域の住宅事情の中、昔の暮らしの様子を知る人たちは少なくなってきた。地域の人材の発掘やつながりといった点が、今後の課題の一つとなる。